

イフリーキーヤにおけるアラブ諸軍団の反乱

余 部 福 三

【要約】アッバース朝初期、七九四年から八三三年までイフリーキーヤで断続的につづいた一連のアラブが起こした騒乱は、これまでタールビーンなどによって、アラブとイラン人の争いとか、アラブの部族間闘争とか、アッバース朝体制派とシーア派の争いなどに過ぎないことがわかる。アラブはウマイヤ朝時代の歴史に照らして考えれば、このような解釈はまったく空想的には四次の波をなして、大挙、イフリーキーヤ内部に移住、定着した。その結果、征服者としての特権である土地・税収の分配が著しく不足するようになった。一連の騒乱はアッバース朝初期に定着したホラーサン軍、シリア軍、バスラ軍の土地・税収の争奪と、ウマイヤ朝時代のエジプト出身の征服者の奪権闘争、さらに勝利した辺境のザーブ地方のホラーサン軍による、専制化を進めたかれらの指導者アグラバ家に対する闘争からなる。

史林 八一巻六号 一九九八年一月

はじめに

七世紀末の征服以来、アラブは数次の波をなして大挙してイフリーキーヤ *ifriqiya*（ローマ時代のアフリカであり、現在のチュニジアを中心としてアルジェリア北東部、リビア北西部を含む地方）に移り、おもに内陸部に新設された軍営都市カイラワン *Qayrawan* や、地中海に臨んで新設された海の辺境都市トゥヌス *Tunus*（チュニス）、アルジェリアのベルベルに対する辺境にあたるザーブ *Zab*（アルジェリア中部のフドナ *Hudna* 湖地方）の軍営都市トゥブナ *Tubna*（ローマ時代の

(Thubuae) に定着したが、そのかなりの部分が各地に土地を獲得し、地代を得るようになった。

別稿^①で示したように、この移住の波は、(一)七世紀末の征服時におけるエジプト軍・シリア軍、(二)七四〇年代におけるモロッコ北部・アルジェリア北西部のベルベル反乱鎮圧のために、ウマイヤ朝から派遣されたシリア軍、(三)七六〇—七七〇年代に「イバード派」^② *Thadya* のベルベルからイフリーキヤを奪回するため、アッバース朝から派遣されたホラーサーン *Khurasan* 軍・シリア軍・バスラ *Basra* 軍(これ自体がアブル・ハッターフ *Abu'l-Khattab al-Ma'arrî* に対して派遣されたホラーサーン軍の将ムハンマド・イブヌル・アシュアス *Muhammad b. al-Ash'ah al-Khuz'î* の軍と、そのあと、アブー・ハーティム *Abu Hatim al-Maluzî* に対して派遣されたバスラのアズド *Azd* 族の指導者、ムハッラブ *Muhallab* 家のヤズィード・イブン・ハティム *Yazid b. Hatim* の軍のふたつに分かれる)の三次の波からなる。あいつぐ大規模な流入によるアラブの人口増大にもかかわらず、これらのアラブ軍の主要部分^③はベルベルの侵攻やより古いアラブ定着者の抵抗に対して、ときの中央政府の支配を確立するため、かれらの意志に反しても、そのままイフリーキヤに定着させられた。しかも、アラブは七一〇年代にアンダルス *al-Andalus* (イベリア半島)を征服したものの、七四〇年代のベルベルの大乱以後、アルジェリアのベルベルによってザーフ以西への進出をかたく阻まれるようになった。

各征服地に定着したアラブはその征服地の税収を給与として分配され、通常はイラクやエジプトの場合のようにかれらの軍営都市に集住して土地の分配を受けなかったが、旧支配層の多くがローマ帝国の未征服の部分に亡命したシリアでは給与に加えて、土地や住居の分配を受けるものも少なくなかった。土地を獲得したものは地代收入を得るが、通常は税としてではなく、宗教的義務としての淨財の喜捨という意味でウシュル *ushr* を支払う義務を負った。土地の獲得はウマイヤ朝を支えたシリアのアラブの特権と化し、かれらも征服に参加したイフリーキヤでは、給与支給のほかに、ローマ(ビザンツ)領に亡命した旧支配層の土地の分配が指導層を中心にかなり広範に行われた(のち、アンダルスでも広範に行われる)。

ムハッラブ家の歴代総督、ヤズィード(在任一五五七—七七二—八七)、その兄弟ラウフ *Ra'f al-Harithi* (一七一—四〇七七八—九二)、ナスル *Nasr b. Habib* (一七四—一七九—一三) の支配下で平和を享受していたイフリーキーヤで、一七八〇—七九四年からシチリア *Sicilya* 征服戦争が着手された二二二—八二七年のあとまで数十年にわたって、現地のアラブ軍によるアッバース朝総督への抵抗運動がつづく未曾有の騒乱の時代に突入した。これらの諸反乱の原因究明については、チュニジアのタリービー *Talibi* による研究^④以外にはなく、しかも、タリービーは視野をイフリーキーヤとシチリアのみに限り、アッバース朝やイスラーム全体に対する知識と理解に欠けるため、その解釈はしばしば大きな誤謬を含んでいる。本稿の目的は、アッバース朝やイスラーム世界全体の枠組みの中で、これらの諸反乱の原因を究明することにある。

また、史料の信憑性について、イギリスのワンスブラ *Wansbrough* はタリービーの研究に対する書評の中で、初期イスラーム時代のイフリーキーヤに関する史料ははるかに後世の、遠く離れた地域で書かれた著作にすぎず、しかも、政治的、宗教的に中立ではなく、したがって、信頼できないと断じた^⑤。しかし、中心的な史料はイフリーキーヤのアラブの間で伝えられ、一一世紀初頭のズィーリー *Zaydi* 朝時代にラキーク *Raqiq* によって集大成された政治事件の伝承であり、それを、一〇世紀初頭のアブル・アラブ *Abu'l-'Arab* と一一世紀後半のマリーキー *Malik* によって集大成されたイフリーキーヤの学者・禁欲家に関する膨大な伝承群や、エジプト、アンダルスのアラブの間ではほぼ独立に伝えられた伝承、まったく別系統のイバード派の伝承、さらに九世紀のハリーフ *Khaliifa*、タバリー *Tabar*、バラズリー *Baladhuri*、ヤアタービー *Ya'qubi* などの「世界史」に保存されているウマイヤ朝、アッバース朝中央政府による総督任免・軍派遣のごく簡単な公記録と比較照合することができる^⑥。また、ラキークの編集はとくに親ファアティマ *Fatima* 朝の総督イブラーヒーム *Ibrahim* 二世だけは例外)、かなり客観的、中立的と言える。したがって、ワンスブラが言うほど、史料に信頼性が欠けることはない。ワンスブラの議論は、『コーラン』を含め、あらゆる初期イスラーム文献を徹底的に疑うかれ一流の誇張で

もあるし、また、当時は未発見であったラキークのイフリーキーヤ史を知らず、エジプトやバグダードで独立に書かれた著作を考慮しなかった結果から生じたものと思われる。ラキークの歴史は一九七〇/八一三年以後の部分がなお未発見であるが、その部分も一三世紀前半のイラク北部のイブヌル・アシル Ibn al-Aḥir とアンダルス・バレンシアのイブヌル・マッバール Ibn al-Abbār / 一四世紀前半のエジプトのヌワイリー Nuwayrī とギリシヤのイブン・イザリーー Ibn 'Iḍhārī からよって忠実に引用、保存されている。

アラビア語史料の典拠は本文中の（ ）内に割り込んだ。その略号は次の通りである。

- Raḡīq: al-Raḡīq, *Ta'riḥ Iḥrāḡ wa'l-Maghrib*, ed. 'Abdullāh al-'Alī al-Zaydān & 'Izz al-Dīn 'Umar Mūsā, Beirut, 1990.
Aḥir: Ibn al-Aḥir, *al-Kamīl fi'l-ta'riḥ*, ed. C. Tornberg, Beirut, 1965-7, vol. 6.
Abbār: Ibn al-Abbār, *al-Hullat al-siyarā'*, ed. Ḥusayn Mu'nis, 2 vols., Cairo, 1963.
Nuwayrī: al-Nuwayrī, *Nihāyat al-arab fi funūn al-ādab*, 31 vols., Cairo, vol. 24, ed. Ḥusayn Naṣṣār, 1984.
'Iḍhārī: Ibn 'Iḍhārī, *al-Bayān al-muḡrib fi akhbār al-Andalus wa'l-Maghrib*, ed. C. S. Colin & É. Lévi-Provençal, 4 vols., Beirut, 1980, vol. 1.
Khalidūn: Ibn Khalidūn, *Kitāb al-'ibar*, 14 vols., Beirut, 1983-6, vol. 7.
'Arab: Abu'l-'Arab b. Tamīm, *Tabaqat 'ulamā' Iḥrāḡ wa Tūnus*, ed. 'Alī al-Shāḥr & Nu'aym Ḥasan al-Yaḥī, Tūnus, 1985.
Mālikī: al-Mālikī, *Riyād al-nufus fi tabaqat 'ulamā' al-Qayrawān wa Iḥrāḡ*, ed. Ḥusayn Mu'nis, Cairo, 1951.
Kindī: al-Kindī, *Wulāt Miṣr*, ed. Ḥusayn Naṣṣār, Beirut.
Taghribirdī: Ibn Taghribirdī, *al-Nujūm al-zāhira fi mulūk Miṣr wa'l-Qāhira*, ed. A. Z. al-'Adawī, 12 vols., Cairo, 1929-56, vol. 2.
Qūḥḡya: Ibn al-Qūḡḡya, *Ta'riḥ ifṭihā' al-Andalus*, ed. 'Abdullāh Anīs al-'Abbār, Beirut, 1957.
Zakarīyā': Abū Zakarīyā' al-Warjānī, *Kitāb siyar al-a'immat wa akhbārihim*, French tr. by R. Le Toumeau, in *Revue Africaine*, vol. 104 (1960).

Khalifa: Khalifa b. Khayyāt, *Ta'rikh*, ed. Akram Diyā' al-'Umari, Madīna, 1985.

T'abarī: al-T'abarī, *Ta'rikh al-rusul wa'l-mulūk*, ed. M. J. de Goeje et al., 15 vols., Leiden, 1879-1901, series III.

'ayūn: al-'Yūn wa'l-hadā'iq fī akhbār al-haqā'iq, as *Fragmenta historiarum Arabicorum*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1869.

Baladhuri: al-Baladhuri, *Futūḥ al-buldan*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1866.

Ya'qūbī, T: al-Ya'qūbī, *Ta'rikh*, 2 vols., Beirut, 1960, vol. 2.

Ya'qūbī, B: al-Ya'qūbī, *Kitāb al-buldan*, ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1892.

Bakrī: al-Bakrī, *Kitāb al-masālik wa'l-manālik*, as *Description de l'Afrique septentrionale*, ed. W. McGuckin de Slane, Paris, 1965.

Yaqūt: al-Yāqūt al-Hamawī, *Mu'jam al-buldan*, 5 vols., Beirut, 1957.

Michel: *La chronique de Michel le Syrien, patriarche jacobite d'Antioch*, 4 vols., ed. et tr. J. B. Chabot, Paris, 1899-1905, vol.3.

① 余部福三「イフリーキーヤにおけるアラブの定着とセルベルの抵抗運動」『人文自然科学論集』一〇四号、一九九七年、四一—七六頁。

② イバート派とは、ウマイヤ朝にもハシム家運動にも同調しない、ウマイヤ朝末期のバスラのアラブとマワリー *muwallāh* (被征服民のうち、アラブ有力者の庶民となったもので、ほとんどがイスラーム改宗者) の一般的潮流の中で、ウマイヤ朝に対する反乱に同調しなく多数派のムルシア Murji'a 派に對して、蜂起を選んだ人々を指すものであろう。最初はおくまで他称であり、単一の党派ではなく、それぞれの勢力が各地で独立に行動したと思われる (余部、五九—六〇頁)。

北アフリカでは九世紀にはイバート派はアルジェリア北西部のルスタム朝の支持者を指すようになった。

③ 本稿ではイラン系マワリーを多数含むホラーサーン軍総体をも便宜上「アラブ」に含める。

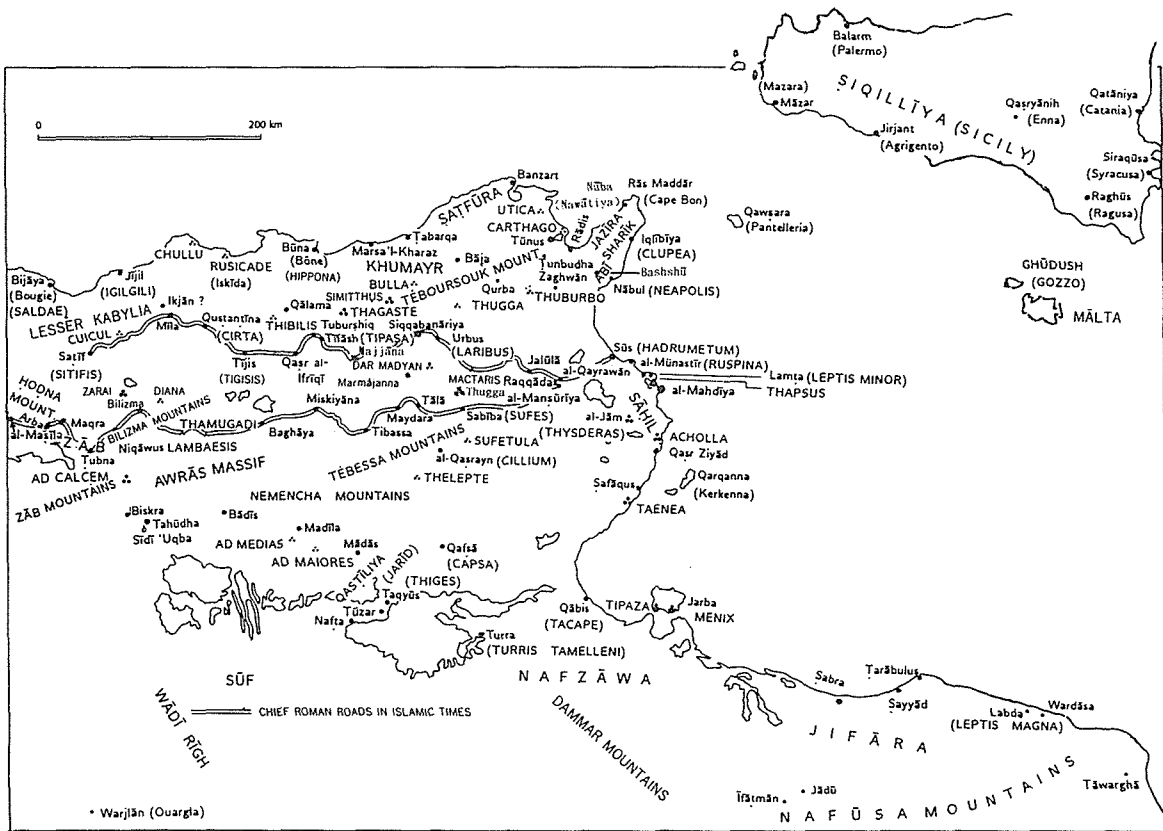
④ Mohamed Talbi, *L'émirat Aghlabide 184-296/800-909, Histoire politique*, Paris, 1966.

⑤ J. Wansbrough, "On recomposing the Islamic history of North Africa," *Journal of the Royal Asiatic Society* (1969), pp. 161-170.

⑥ 余部「イフリーキーヤ」四四—四五頁。

一 アブダワイフとイブヌル・ファールスィーの反乱

アブドウツラー・イブヌル・ジャールズ 'Abdullāh b. 'Abd Rabbihī b. al-Jarūd とムハンマド・イブヌル・ファール



スィー Muhammad b. Yazid al-Farsi はともにトゥヌスのアラブ軍の指導者で、一七八／七九四年にイフリーキーヤ総督、ムハッラフ家のラウフの子ファドル Raḍī に対し反乱を指導し、それぞれ、軍指揮 *tabīr al-harb* と作戦宣伝 *tabīr al-ra'y wa mukātabat al-nās* を担当した (Raḍīq 155)。

前者は、アラブのアブドゥルカイス Abd al-Qays 族をイラン語風に表現したかれの異名アブダワイフ Abdawayh (Raḍīq 152) から見ても、ホラーサーンの主要都市のひとつヘラート Herāt の出身であること (Khaḥfa 464) から見ても、*abnā'ī* (*abnā' al-awāla* 革命の子、すなわち、ホラーサーン革命軍の第二世代) という *nisba* (Tabarī 630; Athīr 136) から見ても、ホラーサーン軍に属していることは間違いない。ところが、ターリビーはかれがホラーサーン軍に属する意味を理解していないため、誤って *Anbarī* と読んでいる。また、アブダワイフがウマイヤ朝初期のバスラのアブドゥルカイス族の名門、ジャーロド家に属していたことは確実である。ジャーロド家はバスラとクーファ Kūfa の総督ハッジャージュ・イブン・ユースフ Ḥajjāj b. Yūsuf に対する反乱に失敗したあと、一族の多くがバスラからホラーサーンに移住したものである。アブダワイフが指導者に選ばれたのも、かれの軍事的能力や指導力がかわれたからではなく、家柄が良く、富裕であり、多くのアラブを結集することが期待できたからであろう。かれを指導者につぐ上で大きな役割を果たした (Raḍīq 151) イブヌル・ファールスィーも、*Khurāsānī* というニスバ (Tihārī 86) から見て、ホラーサーン軍に属することとは確かである。

この反乱がホラーサーン軍主体の反乱であることはつぎの事実から明白である。

- 一 ふたりの最高指導者がともにホラーサーン軍に属すること。
- 二 ふたりはトゥヌス軍に支持されたあと、バージャ Bajja (Yaga) のホラーサーン軍に支持を訴え、その支持を得た (Raḍīq 155-6)。

三 総督ファドルが派遣したカイラワーン軍に対し、アブダワイフがザイトゥーン Zaytūn に派遣したトゥヌス軍の

斥候部隊のふたりの指揮官のひとり、マンスール・イブン・ハムヤーン Mansūr b. Ḥamyān は、父が明らかにペルシア語（腰帯び）の名前をもち、したがって、ホラーサーン軍の兵であろう（Raqiq 153）。

四 カイラワーン内部のホラーサーン軍兵士 *abnā' Khurāsān* はトゥーヌス軍を「我々の子であり、兄弟である」と呼び、かれらとの戦いを拒否したし、ホラーサーン軍 *ahl Khurāsān* の中でファドルから各地の代官や徴税官に任命されていたものたち *'ummal-yas'na'*、ファドルへの協力を拒否するようになった（Raqiq 156）。

五 ファドルによってカイラワーンから派遣されたヤズィード・イブン・ハーティムの子アブドゥッラー・'Abdullāh がタサース「*asas*」(Tanbiyas) でトゥーヌス軍をいったん破ったとき、かれの幕僚はアブドゥッラーの執拗な攻撃を讃え、敵のトゥーヌス軍を *ahl Khurāsān* と呼んでいる（Raqiq 157）。

六 最終的にタサースの戦いに勝ったトゥーヌス軍がカイラワーンを攻撃したとき、カイラワーン市内のホラーサーン軍 *abnā'* は内部から城門を守っていた兵を倒し、門を開いた（Raqiq 158）。

これに対して、ファドル側はアズド族を主体としたバスラ軍のほか、シリア軍のかなりの部分が含まれていたことがつぎの事実によって確認される。

一 ファドルが辺境のザーフ地方を除く各地の *'ummal* に対して忠誠を呼びかけ、カイラワーンに集合を命じたとき、シリア軍の将シャムドゥーン Shandūn、アブル・ムギール Abu'l-Mughīra、アブー・ウマイヤ Abu 'Umayya らがうちやく駆けつけ、ファドルから資金を与えられた（Raqiq 156, 160）。

二 カイラワーン市内のホラーサーン軍は「ファドルがホラーサーン軍に対してシリア軍 *ahl al-Shām* を優遇してゐる」と不満を述べている（Raqiq 156）。

三 タサースの戦いではじめトゥーヌス軍を破ったカイラワーン軍は *ahl al-Shām* と云う（Raqiq 157）。

四 タサースの戦いで戦死したカイラワーン軍の指揮官のひとりにはシリア軍のヒムス Hims (Emsa) 軍団の Abu'l-

Aswad による (Raqiq 158)。

五 シリア軍のアムル・イブン・ムアウィヤ Amr b. Mu'awiyah はバスラ軍のナドル al-Nadr b. Hafs とともに、カービス Qabis (Tacaqe) に進んだ中央政府の使者ヤクティーン Yaqin (後出) に合流した (Raqiq 160)。

ターリビはこの騒乱の意味をまったく理解できずに、アラブとイラン人の争いというステレオタイプの解釈をしている^③。長い平和を破った反乱の原因は、根本的には、イフリーキヤがローマの穀倉であり、帝国の中でも都市化が非常に進んだ地域であったにもかかわらず、面積が小さく、良好な土地が狭隘で、したがって、税収が必ずしも大きくはなかったことにある^④。このため、支配層としてのアラブはあいつぐ大量流入により土地や税収の不足に悩まされるようになり、ムハッラブ家の諸総督はヤズィード・イブン・ハーティムとともにイフリーキヤに移ったシリア軍とバスラ軍を、それ以前にムハンマド・イブヌル・アシユアスとともにイフリーキヤに入ったホラーサーン軍よりも優遇せざるを得なくなった。ヤズィードはホラーサーン軍の不満を懐柔していたが、ファドルはトゥーンヌス代官に任命した甥、ムギーラ Mughira b. Bishr b. Rawh を通じて、トゥーンヌス駐留軍に対する給与割増金 *asaf* を廃止し (Abbar I 77)、給与を減額した (Raqiq 155)。このため、トゥーンヌス軍はファドルに反発して前総督ナスルを支持し、その結果、ファドルに圧迫されたとらう (Ahrir 136)。

アブダウィフがカイラワーンを占領して、ファドルを殺し、ナスルを含めてムハッラブ一族をイフリーキヤから追放した (Tdhart 87-8; Nuwayri 92; Ahrir 137; Abbar I 78-9, 82) ことに対して、シリア軍の将、シャムドゥーンやアブル・ムギーラが抵抗した。これを利用して、ミィラ Mi'la (Milave) のペーリク・イブヌル・ムンジル Malik b. al-Mundhir al-Kalbi とウルブス al-Urbus (Aribus) のファッラーフ Fallah b. 'Abd al-Rahman al-Kalabi がカイラワーンに進撃し、アブダウィフの支持派を敗ってカイラワーンを占領した (Tabari 630; Ahrir 137; Nuwayri 91-2; Abbar I 86)。

マーリクはヒムス軍団に属するシリア軍の将であり (Abbar I 84, 86)、ヒムス軍団、ディマシク Dimashq (Damascus)

軍団でもっとも有力な部族集団であり、ローマ時代以来シリアに土着していたカルブ族 *Qalb* 族に属する。一方、ファッラーフは征服時にイエメン *Yaman* からシリアに移ってきたヒムヤル *Himyar* 系ズル・カラール *Dhu'l-Kalā'* 族の出身で、イエメン出身者が多いデイマシク軍団に属すると思われる。おそらく、ウマイヤ朝末期の一二三／七四一年、ベルベルの反乱鎮圧に派遣されたシリア軍は、イフリーキーヤからベルベル叛徒を一掃したあと、アンダルスの場合と同様、軍団別に各地に定着したと思われる。このとき、ヒムス軍団はミールラに、デイマシク軍団はウルブスに定着したものである^⑥。アッバース朝時代の一五五／七七二年に、アブー・ハーティム指導下のイバード派の乱を鎮圧するためにヤズィード・イブン・ハーティムとともに派遣されたシリア軍も、同じ軍団がウマイヤ朝末期に定着したところに定着し、軍団の古い定着者から土地の一部を奪ったものと思われる^⑦。やや誇張して、古いシリア軍は兵籍を剝奪され、臣民 *ra'ya* の地位に落とされたとも言われる (*Qutayba* 41)。

シリア軍はバスラ軍とともに、ヤズィード以来、ムハッラブ家の総督を支え、特権的な地位にあった。かれらがホラーサーン軍によるムハッラブ家政権の転覆に反発したのは当然である。この争いが本質的には土地、税収など征服の果実の争奪であることは、カイラワーンを占領したシリア軍がただちに付近の農村を略奪したことも表れている。結局、トゥヌスに退いていたアブダワイフがカイラワーンに進撃し、タサースの戦いでマールイクを敗死させ、ウルブスに後退したシリア軍に対し、ハンマード *Hamād b. Abī Hamād* を派遣した (*Raḡiq* 159-60)。

シャムドゥーン、アブー・ウマイラ、アブル・ムギーラ、ファッラーフなどウルブスに後退したシリア軍が救援を要請した相手がムハッラブ家のザーフ代官アラール・イブン・サイーズ *Al-r' b. Sa'īd b. Marwān* であったのは当然である。アラールはヤズィードとラウフの時代にタラーブルス *Tarabulus* (Tripolis) 代官を努めた (*Raḡiq* 126, 139) あと、ナスルとフアドルによってザーフ代官に任命されていた (*Raḡiq* 148, 150)。要請を受けたアラールは辺境の兵及び宥和していたベルベルの一部を率いて (*Raḡiq* 162) 'ウルブスでシリア軍と合流した (*Raḡiq* 160; *Abbār* I 87)。このあと、ザーフ地方では、こ

の地方のかつての代官で、イフリーキーヤ総督にもなったホラーサーン軍のアグラブ al-Aghlab b. Salim b. 'Aqqal (タミーム Tamim 族) の子イブラーヒーム Ibrahim b. al-Aghlab が残された兵をまとめて秩序を維持したものと、ターリビは推測している。^⑧

アッバース朝のカリフ、ラシード Harun al-Rashid とバルムク Barmak 家の宰相 *wazir*、ヤフヤー・イブン・ハーリッド Yahya b. Khalid はホラーサーン軍のカイラワーン占領後、中央のホラーサーン軍の主将ハルサマ・イブン・アヤン Harthama b. Ayan をイフリーキーヤに派遣した。この人事は明らかにイフリーキーヤのホラーサーン軍を戦争ではなく、人的関係や利益供与を通じて反乱をやめるように説得する目的をもっていた。したがって、ケネディの推測とは違って、ハルサマ軍は小規模であったと思われる。^⑨ ハルサマはバルカ Barqa 地方(リビア北東部)のアジュダービヤ Ajdabiya にとどまり、ホラーサーン軍の革命期の最高指導者アブー・ムスリム Abu Muslim の僚友であったイラン系のマウラー (Tabari 103; Athir 138)、ヤクティーンの異名をもつヤフヤー・イブン・ムーサー Yahya b. Musa をカイラワーンに派遣してホラーサーン軍の説得を試みた。ヤクティーンはアブダワイフの説得には失敗したが、カティーア *qatifa* (カリフが國有地の中から授与する土地) 供与の約束などを通じてイブヌル・ファールスィーをはじめ、ホラーサーン軍の大きな部分をアブダワイフから離反させた。このため、ウルブスから進撃してきたアララの攻撃にさらされていたアブダワイフは、タラーブルスからカービスに進んだハルサマの前に降伏を余儀なくされた。かれはバグダードに送られたが、ラシードによって厚遇されたところ (Raqiq 161-7; Nuwayri 93-5; 'Idhari 88; Athir 137-9; Abbar I 84, 87; Tabari 630; Ya'qubi, T 411; *uyun* 298-9; Khalifa 464)。

こうして、一七九年ラビー第二月一日／七九五年六月二四日、カイラワーンに入ったハルサマは、すべてのアラブにアマン *aman* (大赦) を与え、ホラーサーン軍とシリア軍の平等を認める形で、しかし、事実上は給与の不削減や土地供与などを通じてホラーサーン軍の優位を回復させることによって、戦争によらずイフリーキーヤを平定した (Raqiq 168)。

また、ハルサマは、タフーザ(Thabusa)に拠ってザーブ地方を事実上支配していたイブラーヒームをザーブ代官に任命し、しかも現地の兵の給与の一部を送付することを約束したようである(Baladhuri 233-4; Athir 139; *Wynz* 302)。ターリビは給与の財源を中央政府からの補填と推測しているが、おそらくイフリーキヤまたはエジプトの税収から負担されたと思われる。

- ① Talbi, p. 78.
- ② P. Crone, *Slaves on horses: The evolution of the Islamic polity*, Cambridge, 1981, pp. 115-6; Abd al-Ameer, Abd Dixon, *The Umayyad caliphate 65-86/684-705*, 1971, London, pp. 143-7.
- ③ Talbi, pp. 79, 80.
- ④ 現在(一九九六年)でも、チュニジアは国土が比較的開発されているにもかかわらず、人口九百万程度で、未開発地が多いアルジェリア、モロッコがそれぞれ三千万に近い。チュニジアの穀作の適地はメジェルト、Medjerda (Bagradas)川流域の狭隘な地に限られ、アルジェリア、モロッコとは比較にならない。ローマの穀倉となったのも、生産に比して人口が少ないからである(輸出货量は生産量の一割あまり)。また、多くの都市の繁栄はオリヴ栽培に負うところが大きい。T. Frank (ed.), *An economic survey of Ancient Rome*, vol. 4, New Jersey, 1959, pp. 39-51.
- ⑤ Talbi, p. 78.
- ⑥ 余部「イフリーキヤ」五六頁、Talbi, pp. 79-80.
- ⑦ 余部「六四頁」。
- ⑧ アグラブについては、余部、六二頁参照。イブラーヒームとその兄弟たちは父の戦死後、エジプトに移り、その軍人給与支給片 *drizan*

から給与を受けるようになった。アグラブの兄弟スファヤーンの孫サーリム・イブン・サワタは一六四／七八〇年エジプト総督になった(Kindt 146; Taghribirdi 46)。しかし、イブラーヒームが一七四／七九〇年、給与打ち切りに抗議して税務長官を襲い、新総督ムハンマド家のダーワード・イブン・ヤズィード Da'ūd b. Yazid に反逆して追放され、ザーブ地方に亡命した(Taghribirdi 74, 76; Baladhuri 233; Ya'qubi, T. 412; Raqiq 177; Idhari 92; Abbar 193)。ただ、これがザーブにきた年代は不明である。

- ⑨ Talbi, p. 98.
- ⑩ H. Kennedy, *The early Abbasid caliphate*, London, 1981, p. 193.
- ⑪ Talbi, p. 81.
- ⑫ Ya'qin とはクルシヤ語の *yak dm* (ひとりの信仰) に由来するところ。それについては余部参照のよう。Amkam Elad, "The siege of al-Wasit", *Studies in Islamic History and Civilization in honour of Professor David Ayalon*, Jerusalem, 1986, pp. 59-90, esp. p. 83, note 109; Said Amir Arjomand, "The crisis of the Imamate and the institution of occultation in Twelver Shiism", *International Journal of Middle East Studies* 28(1996), pp. 491-515, esp. p. 492.
- ⑬ Talbi, p. 105.

二 タンマーム・イブン・タミームの反乱

タリビーンはハルサマがイフリーキーヤのアラブを抑えることに失敗したため、自ら辞職したとしている^①。事実はそのではなく、中央政府の主将としての責務をもつハルサマがイフリーキーヤの当面の情勢が安定化するのを待って、二年あまりの滞在のあと、一八一年ラマダーン月／七九七年一月、新たに送られて来たホラーサーン軍の将で、ラシードやバムラク家と関係が深い(Raqiq 169; Abbār I 89)ムハンマド・イブン・ムカーティル Muḥammad b. Muḡātil b. Ḥakīm al-Akḥīに総督職を譲って、バグダードに帰還したと考えるべきであろう(Raqiq 168-70; Nuwayrī 95-6; Athīr 139, 154; 'Iḥārī 89; Tabarī 645 [AHI80]; Ya'qubī, T 411; Khalīfa 464)。イブラーヒームがイフリーキーヤ総督から独立したザーフ総督になったのはこのころのようである(Raqiq 177-8)。これは、アルジェリア北西部のティーハルト Thārt に拠ったイバード派のルスタム Rustam 朝とモロッコ北部のファース Fas (フェス Fes) に拠ったアリー家の王を戴くイドリース Idris 朝という、事実上のベルベル勢力が成長し、ザーフ方面の防衛がさらに重要になってきたからであろう^②。

一八三／七九九年、新総督イブン・ムカーティルに対して、トゥヌス代官タンマーム・イブン・タミーム Tamīm b. Tamīm が反乱を起した。かれはタミーム族に属し、イブラーヒームの遠縁にあたる(Abbār I 91)ホラーサーン兵 *abnā'* であり(Khalīfa 464)父のとキイブヌル・アシュアスに從つてイフリーキーヤに移つて来た(Athīr 92; Abbār I 92)。学者列伝作家アブル・アラフはかれの曾孫にあたる('Iḥārī 90; Abbār I 89, 92)。この反乱がホラーサーン軍 *ahl Khurasān* とシリア軍 *ahl al-Shām* を主体としていたことは次のことから明白である。

一 反乱を始めたムッラ Murra b. Mukhallad al-Azdī はファッラーフに扇動されたシリア軍とホラーサーン軍によつて指導者に擁立され、一部のベルベルをも結集した。結局、かれはイブン・ムカーティルが派遣した軍の前に敗死した(Raqiq 170; Athīr 154; Abbār I 90-1)。

二 トゥーヌス代官タンマームが市内のシリア軍、ホラーサン軍の忠誠の誓いを受けて、反乱を起こし、一八三年ラマダーン月／七九九年十月、カイラワーンに進撃し、これを占領した (Raqiq 170; Abbar I 89)。

三 タンマームの支持者の中には、アブダワイフの反乱にも協力したホラーサン軍指揮官タバキー‘Abbās al-‘[abāqīやジュルデーイー‘Isā b. Yazīd al-Julūdīらがいた (Raqiq 171)。

反乱の主な原因は、イブン・ムカーティルが中央政府の意を受けてエジプトからの財政補助金を削減するため、もしくはザープのアラブ軍の給与の財源確保のため、イフリーキヤにおける歳出削減に取り組み、軍の給与をカットした *iqāza‘ min arzaq al-jund* (Raqiq 170) である。ターリビは、同じころのアッバース朝のエジプト諸総督がデルタ東部ハウフ Hawt 地方のアラブ入植者の土地に対して課税する政策を採って、反乱を招いた (Tabari 629-30; Kindī 160-1, 166-7; Taghrīrī 87, 114) ことから、イブン・ムカーティルがイフリーキヤのアラブ軍から土地を没収しようとしたと類推したが、ターリビの史料の読み方や解釈には大きな無理がある。⑥。しかも、アラブが征服のずっとあとに土地を獲得したエジプトと違って、イフリーキヤではアラブ兵が土地をもつのは征服当初以来の慣行であり、基本的な特権である。この私有地に課税、増税あるいは税の捕捉を行うことはじゅうぶん考えられるが、反乱の場合を除いて、没収はありえない。この場合、明らかに、総督はトゥーヌス駐留軍の給与を削減しようとしたのである。他方では、イブン・ムカーティルはビザンツ帝国のシチリア総督コンスタンティノスとの友好を維持するため、その求めに応じて武器、鉄、銅などの軍事物資を供給し (Maīkī 141) 、これらの政策に対する反対運動の先頭に立った、人々の尊敬あつゝ禁欲主義者バフルール Bahūl b. Rashīd を処刑した (Raqiq 169-70; Maīkī 142) は、一層、かれに対する反発に油を注ぐ結果になり、カイラワーンでは法学者イブン・ファッルフ ‘Abdullāh b. Farrūkh を中心とした蜂起計画を生じた (‘Arab 109)。

タンマームがトゥーヌスのホラーサン軍とシリア軍を率いてカイラワーンに進撃すると、イブン・ムカーティルは簡単に降伏し、タラーブルスに後退した。しかし、ザープ総督イブラーヒームはこれに強く反発し、逃れて来たハンマード

やシリア軍のアムル・イブン・ムアーウィヤなどを集めた。かれはザーブのホラーサーン軍の将イムラーン・イブン・ムジャーリド 'Imrān b. Mujāhid b. Yazid を先鋒としてカイラワーンに進撃し、タンマームをトゥーヌスに後退させ、タラーブルスからイブン・ムカーティルを総督として迎え入れた (Raqīq 170-1, 182-3; Nuwayrī 96-7; 'Iḥārī 89-90; Aḥrī 154; Abḥār 1 89)。

イブラーヒームが敏感に反応したのは、ザーブ地方に大量に駐留する兵の給与の財源として、トゥーヌスの兵の特権削減に死活的な利害をもっていたからであろう。実際、イブラーヒームがザーブで拳兵したとき、遠征費用の財源に苦慮し、地方の商人に貸し付けを強制しようとした (Raqīq 180)。こうして、争いはホラーサーン軍内部でのザーブ軍とトゥーヌス軍の給与の奪い合いの様相を濃くした。

カイラワーン軍の多くがイブン・ムカーティルの復帰に不満を示すと、タンマームが再度トゥーヌスからカイラワーンに進撃をはじめた。しかし、タサースで再び、イブラーヒームとイブン・ムカーティルの連合軍に敗れて、アマーン *amān* (大赦) 供与を条件に降伏した。敗れたタンマームやジュルーデー、タバキーら、トゥーヌスのホラーサーン軍の将はザーブのホラーサーン軍の将、ハルーン Ḥārūn と呼ばれるハムザ・イブヌツ・サッバル Ḥanzab b. Sa'īd b. al-Sabbal al-Razī (Razī Ḡ nisbā h Nuwayrī 111) によってバグダードに連行され、マトバク Matbaq 獄に投獄された (Raqīq 171-4, 184-5; 'Iḥārī 90-2; Nuwayrī 97-9; Abḥār 1 92-3, 108)。しかし、反乱で重要な役割を果たさなかったタンマームの兄弟サラマ Salama は拘束されることもなく、バグダードに来て、ラシードに厚遇され、兄弟の釈放に奔走した。実際、ジュルーデーとタバキーは釈放されて中央政府で重用された (Raqīq 174, 187; Abḥār 1 93, 107-8; Aḥrī 156)。^⑦

このように、争いはホラーサーン軍内部で、ザーブ軍がトゥーヌス軍に勝利する形で終結した。イブン・ムカーティルはなおバルマク家に頼って総督職にとどまろうとしたようであるが、ザーブ総督イブラーヒームが一八四年ジュママーダー 第二月一二日／八〇〇年六月九日、ラシードからイフリーキーヤ総督に任命され、イブン・ムカーティルはバグダードに

帰還した (*ʿuzūn* 302-3; Raḡiq 185-6; Nuwaynī 100-2; Ṭḥarī 92; Balādhurī 234; Ya'qūbī, T 411-2; Tabarī 649; Khalifa 464; Abbar 193a)。ザーブ代官にはハムザ・イブヌッ・サッバールがイブラーヒームによって任命され、トゥブナに駐留した (Abbar 1107; Raḡiq 187)。タリービイーはイブラーヒームが最初からイフリーキヤ総督職をねらっていたのではなく、単にザーブ地方への財政援助増額を要求していたにすぎないと考えているが、三五年前の一四八／七六五年、ザーブ代官であったかれの父アグラブが、イフリーキヤ総督ムハンマド・イブヌル・アシユアスに対するホラーサン軍の反乱を利用して、総督職を獲得したことの記憶から、最初から総督職をねらっていた可能性も排除できない。

また、イブラーヒームはエジプトからの財政補助金の打ち切りに同意し、逆にイフリーキヤから中央政府に年四万デイナーの送金を約束したという (Ya'qūbī, T 412; Athīr 155)。しかし、ホラーサンやスゲール Ṭḥughūr など、辺境はどこでも多数の兵を擁して、財政赤字を中央や他州から補填されていた事実^⑩や、各地のアラブが給与として分配されるべき税収の中央送付に強く抵抗していた事実を見れば、イフリーキヤの場合も、エジプトからの財政補助金は削減されたかも知れないが、実際にバグダードへ税収を送付したとは到底考えられない。

タリービイーはイブラーヒームの総督叙任についての話を「王朝建設者に対する常套的な説明図式」と考えているし、ワズブラもこれを支持している。^⑪にもかかわらず、タリービイーはイブラーヒームがイフリーキヤの軍と民衆の期待にそって、自らラシードにイフリーキヤ総督任命を願い出たとし、この時点からイフリーキヤが世襲的な総督支配下の事実上の「独立国」になったとしている。ケネデイが言うように、世襲的な権利とか自治的な体制とかいうことは暗黙の内にも認められていたということは史料にはまったく暗示されていない。ワズブラも、世襲の話が後世の史料にのみ登場すること、イブン・ガニム 'Abdullāh b. 'Umar b. Ghānim al-Ru'aynī がカーディー qādī (判事)として留任し、総督に対する監視役になったことを根拠に、否定している。^⑫あくまでイブラーヒームは通常の総督として任命されたことはまちがいない。アッバース朝から見れば、イフリーキヤのアラブ諸軍団に対する抑制とベルベルの侵入に対する防衛を実現

する能力をもち、かつかなり名目上にして忠誠を誓うものであるなら誰でも、総督にふさわしかったのである。官僚制のインフラストラクチュアが未整備な近代以前の「中央集権的専制国家」の遠方の属州や辺境では、このような状態がふつうであった。

- ① Talbi, p. 82.
- ② Talbi, pp. 102-4.
- ③ イフラーヒーームはザーフ総督時代にイドリース二世を暗殺し (Raqiq 178-80; Abbar 152, 98-100; 'Ithari 83, 92) のちイフラーヒーヤ総督になったあとの一八六〇年、イドリース二世の有力な支持者であったマトガラ族長バフルールを殺返らせ、イドリース二世を和平締結に追込込んだとされる (Raqiq 190; Nuwayn 103; Athr 156; Talbi 374-5)。ターリョー (p. 103, note 2, pp. 369-72) はイドリース一世の名が刻印された貨幣が一七九九年までつひき、一八〇年以後にイドリース二世の名になることを根拠に、暗殺を諸年代記の年代より遅い一七九九年、すなわち、イフラーヒーームのザーフ代官任官後のこととし、イフラーヒーームが暗殺にかかわったことを肯定している。しかし、ワンスブラ (p. 167) は、この暗殺がイフラーヒーヤをイバード派やシリア派に対するアッバース朝の辺境とする一般的な図式に沿ったものになすぎないとし、暗殺事件そのものを否定している。
- ④ Julid (Yaqit vol. 2, 156) と Tabaga (Raqiq 163, note 8, Ibn Shubāit 6 *Sharh al-qasida* を引用) はイフラーキーヤの地名で *ayy*。
- ⑤ 森本公誠『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』岩波書店、一
九七五年、一八一―二頁。
- ⑥ Talbi, p. 85, note 1. *arzaq* を給与のかわりに土地財産と読み、*iqata'a* を削減のかわりに没収と読む。
- ⑦ ジェルデーイーはアミーーン al-Amm とアームーン al-Ma'mūn の内乱ではアミーーン側で戦った (Tabari 912-3)。アームーンは勝利後は今度ではアームーンの将としてメッカやイラク南部で反乱軍と戦うようになる (Tabari 986, 991-6, 1003, 1029)。かれは二一三〇年、二一九九年にはヒジブと総督 (Kindi 208; Taghribirdi 204) にもなった。
- ⑧ Talbi, pp. 114-5.
- ⑨ Talbi, pp. 106-7.
- ⑩ F. Amabe (余部福三), The emergence of the 'Abbasid caliphate, Kyoto (京都大学学術出版会), 1995, p. 103; 余部福三『ランド・マームーンのパサンソ邊境政策』『人文自然科学論集』一〇五号、一九九八年、三八頁。
- ⑪ H. Kennedy, "The Barmakid revolution in Islamic government", *Pembroke Papers* 1 (1990), pp. 89-98.
- ⑫ Talbi, pp. 104, 109, note 1; Wansbrough, p. 164.
- ⑬ Talbi, p. 108; Kennedy, *The early Abbasid caliphate*, p. 194; Wansbrough, p. 164.

三 旧イフリーキヤ軍とタラーブルス軍の諸反乱

トゥーススのホラーサーン軍が没落したにもかかわらず、そのトゥーススで一八六／八〇二年にキンダ Kinda 族のフライシユ Khuraysh (Hamds) b. 'Abd al-Rahman が反乱を起した。

タリービーはこの反乱をイドリース二世の有力な支持者であったマトガラ Maighara 族長バフルール Bahlul b. 'Abd al-Wahid によるアルジェリア進出と結びつけて、「シニア派」反乱と規定し、その傍証として反乱への広範な人材の結集、反乱鎮圧後のきびしい制裁をあげている^①。しかし、フライシユがイドリース朝と同盟関係にあったという根拠は、かれがイブラーヒームにあてた反乱宣言の手紙の中で、「イスラーム共同体 al-Umma の敵が諸君を統治すれば、その為政者に従うなど、アリーが語った」と述べていること (Abhar I 102) だけであるが、これは一般的な意味で抵抗権を述べたものであり、フライシユが自らの反乱を正当化するために掲げたにすぎない。一般にタリービーはラシードとバルマク家の争いのような政争や反乱に対し、スンナ派對シニア派というステレオタイプのな解釈を頻繁に行っている^②。しかし、ケネディが言うように、スンナ派や、シニア派の主流となる穩健な一二イマーム派 Imamiya, Ithna 'Ashariya が成立したのは十世紀後半のブワイフ Buwayh 朝初期のことであり、シニア派も、戦闘的なイスマーイール派 Isma'iliya やザイド派 Zaydiyya が成立する九世紀末以前は、きわめて微温的で、絶えず態度を变えるアリー家の不確かな同情者にすぎなかったが、アッバース朝時代において、スンナ派對シニア派という先鋭的な闘争があったわけではなく、これに基づくタリービーのすべての解釈はまったく誤りである。

反乱の主体は征服時にイフリーキヤに定着したエジプト軍のアラブの子孫 *abna' al-'Arab* である。かれらの多くはすでに正規軍 *jund* から排除され、給与を受けていなかった。このことは次の事実を示されている。

一 反乱の指導者フライシユは、かつて一五〇／七六七年にイフリーキヤ総督アグラブに対して反乱を起こしたト

ウーヌス代官ハサン・イブン・ハルブ al-Hasan b. Harb al-Kindi の娘婿にあたり、ジュンドの一員ではなく、ウマ
イヤ朝時代からイフリーキーヤにいたアラブの子孫のひとりである (Abbat I 101-2)。このハサンもイフリーキーヤ
軍に属し、かれらの権益を守るために反乱を起こしていた。^④

二 トゥーヌスのみならず、イフリーキーヤ各地から旧イフリーキーヤ軍のアラブやベルベルが反乱に結集するため、
トゥーヌスに集まって来た (Abbat I 102, note 1; Raqiq 189)。

三 イブラーヒームはフライシユの手紙に対する返書の中で、アッバース朝の伝統的な支持者 *shī'atīhi*, *abnā' ansārīhi*
(すなわちホラーサーン軍) が自側にあり、あくまでアッバース朝を守護すると宣言している (Abbat I 103)。

四 イブラーヒームはこの反乱に対して、イムラーン・イブン・ムジャーリドやハムザ・イブヌッ・サッバールの指揮
下にカイラワーンからホラーサーン軍 *abnā' al-dā'ira* を派遣し、将来の禍根を断つため、トゥーヌスでアラブを大虐
殺した (Raqiq 189-90; Abbat I 104, 108; Nuwayrī 102-3; Athīr 156; 'Idhārī 93)。

トゥーヌスとその近辺では、タンマームの乱の失敗によってホラーサーン軍の勢力が衰えたため、多くが兵籍を奪われ
ていた旧イフリーキーヤ軍が征服者としての権利回復を求めて反乱を起こしたものであろう。そのため、反乱はホラー
サーン軍をイフリーキーヤから追放することを目的とし、アッバース朝そのものを否認せざるを得なくなった (Raqiq
189; Abbat I 102)。

同様な反乱は、二〇七／八二一三年にシチリア女の子 Ibn al-Siqillya と呼ばれるズィヤード Ziyād b. Saḥl が起
した反乱である。タールビイーはシチリア女の子という呼称を根拠に、かれがイブラーヒームが採用した奴隸兵、*abd* のひ
とりと規定した。^⑤しかし、この呼称は明らかにアラブの父と捕虜になったシチリア女性との間にできた男子の子孫とい
う意味であり、シチリア遠征がアッバース朝時代に行われていないことを考えれば、むしろ、ズィヤードがウマイヤ朝時代
のイフリーキーヤ軍の子孫である証拠である。かれはおそらく私有地をもつファフス・アビー・サーリフ Faḥs Abī

Salih (Thuburbo Majus) で挙兵し、奪われた土地を奪回するため、バー ज्याを攻撃したが、現地に定着しているホラー
サーン軍 *abna'* に撃退され、最後はカイラワーンから派遣されたアグラブ朝一族のもとエジプト総督、サーリム・イブ
ン・サワータ Salim b. Sawada b. Sufyan 指揮下の軍に滅ぼされた。この反乱でもまた、反乱兵士の多くは虐殺された
(*ʿayn* 366; *Iḥarī* 96-7; *Aḥr* 329; *Khaldūn* 423)。

二三四／八四八―九年起きたトゥーヌスとアブー・シャリーク半島 Jazīra Abī Sharīk のアラブの反乱も、^⑥ 圧政に対
する民衆反乱の側面をもつとしても、同様な旧イフリーキヤ軍の反乱であろう。反乱の指導者、カリィ Qatī (または
Qawī) として知られるアムル・イブン・スライム Amr b. Sulaym はエジプトに非常に多く、ホラーサーン軍やシリア軍
に少ないトゥジープ Tujīb 族かバリー Barī 族であることから見て、旧イフリーキヤ軍に属すると見てよい。アムルは
二三四年と二三五年に総督ムハンマド一世 Muḥammad b. al-Aghlab b. Ibrahim (二二六―四二／八四一―五六) によってカ
イラワーンから派遣されて来た軍を撃退したが、二二六／八五〇年に反乱が鎮圧され、アムルをはじめ、トゥーヌスとア
ブー・シャリーク半島のアラブの多くは虐殺された (*Iḥarī* 110; *Aḥr* vol. 7, 44; *Yaqūbī*, B 349)。のみならず、イスラーム
法に反して、その妻子の多くが奴隷化され、ベルベルを含むアグラブ朝兵士に分配された。カーディーのサフヌーン
Sahnūn b. Sa'īd al-Tanūkhī は総督の支持要請を拒否して反乱に中立を保つただけでなく、総督をいさめて妻子を解放さ
せた (*Mahīrī* 279-84)。

トゥーヌスのイフリーキヤ軍の乱に似ているのがタラーブルス軍の反乱である。タラーブルスとその周辺のジファア
ラ Jifāra 平地は征服以来、エジプト軍が定着し、その支配するところとなっていた。^⑦ イブラーヒームはここにもホラー
サーン軍 *abna'* を定着させたため、土着のタラーブルス軍の抵抗が強まり、派遣されて来た代官があいついで追放された。
史料では、タラーブルス軍は Banū Abī Kināna とか Banū Yūsuf とか呼ばれている (*Aḥr* 193)。ターリビーはアブナー
をタミーム族の支族サード Sa'd 族 *ahl Tardubūs* をタラーブルスの市民階級 (実は土着のアラブ) とした上で、この争い

をアラブの部族間闘争とか、市民階級によるアラブ軍への抵抗運動とする空想的な解釈を下している。^⑧

一八九〇五年、タラーブルス軍はイブラーヒームが任命した四人目の代官を二七日後に武力で追放した。これに対して、ホラーサーン軍がタラーブルス軍に抵抗し、結局、イブラーヒームの調停で両者は妥協した（*Athir* 192-3）。これに不満なタラーブルス軍の一部はモロッコのイドリース朝の新首都ファース^⑨（フェズ）に移った。^⑩一九六〇八一年にもイブラーヒームの子アブドゥッラーは代官として赴任してまもなく、タラーブルス軍の反乱で追放された。かれは郊外で給与、*ghazā*を支給する（騎兵、日四デイルハム、歩兵、日三デイルハム）ことによってベルベルを集めて、タラーブルスに反攻し、これを占領した（*Athir* 269-70）。しかし、この騒乱が契機となり、ジファアラ平地南方のナフーサ^⑪ *Nafusa* 山脈に拠るイバード派のベルベルによるタラーブルス包囲がはじまり、一九六〇八二年、アブドゥッラーは沿岸地方を除く地域をイバード派に割譲する条件でかれらと和解せざるを得なくなった（*Athir* 270; *Zakariya* 155-8）。

① Talbi, pp. 142-3.

② Talbi, pp. 110-1.

③ H. Kennedy, *The Prophet and the age of the caliphates*, London, 1986, pp. 227-31.

④ 余部「イフリーキヤ」六一頁。

⑤ Talbi, p. 165.

⑥ Talbi, p. 244.

⑦ 余部、五七頁。

⑧ Talbi, pp. 144-5.

⑨ Talbi, p. 377.

四 イムラーン・イブン・ムジャーリドとアムル・イブン・ムアーウィヤの反乱

イブラーヒームはホラーサーン軍を主体としたザーフ地方の駐留軍を基盤にイフリーキヤ総督職を獲得した。しかし、かれを政権に就けた僚友たちのかれを同僚と見なしており、かれとの関係は緊張したものになった。

イブラーヒームは五千（？）に及ぶ奴隷、*abdā*と呼ばれる総督直属の非アラブ近衛兵（黒人またはイタリア半島南部出身者であろう）^①を集め、カイラワーン郊外に行政宮殿都市アッバースィヤ *al-Abbāsiya*（のちには故宮 *al-Qasr al-qadim* と呼ばれ

るようになる)を短期間に建設し、一族、アビード、マワリー、^②家内の従者・奴隸 *haslam*、信頼できる一部のザーブ軍とともに武器、国庫をもつてカイラワーンからここに移った (Raqiq 187; Nuwayri 102; 'Ithari 92-3; Baladhuri 234; *aym* 303)。カイラワーンにはかれの母方の叔父にあたるマアッド Ma'add b. 'Iqal が代官 *'amil* として、バスラ軍のアーシル・イブヌル・ムアンマル 'Amir b. al-Mu'annar b. Sinan が警察 *shurta* 長官として残された (Raqiq 195, 197; Abbar I 106)。このため、財源が不足し、アラブ兵への給与支払いは滞りがちになった。

アビード兵の採用やアッバースィーヤ移転にはイブラーヒームの僚友であるザーブ軍の指導者イムラーン・イブン・ムジャーリドも強く抵抗して、カイラワーンを離れ (Nuwayri 104)、おそらくトゥーヌスカザーブに逃走した。一九四／八一〇年に起きた反乱がアビード採用、アッバースィーヤ移転に反対するホラーサーン軍、シリア軍、バスラ軍を含むザーブ、カイラワーン、トゥーヌスのアラブを結集したものであったことは反乱の指導者のメンバーによって明白である。

一 ホラーサーン軍のイムラーン・イブン・ムジャーリド タミーム族の一派ハンザラ *Hanzala* 族系のラビーン・Rabi'a 族に属し、ムハンマド・イブヌル・アシュアスに從つてイフリーキーヤに移った (Ya'qubi, B 347)。同じ宮殿に住むことを許されるほどイブラーヒームと親しく (Ahrir 156)、タンマームやフライシユに対する遠征軍の指揮官であった (Abbar I 104)。

二 シリア軍のアムル・イブン・ムアーウィヤ ジャズィーラ *Jazira* のカイス *Qays* 系スライム *Sulaym* 族の名門で、第二次内乱でウマイヤ朝のアブドゥルマリク 'Abd al-Malik に執ように抵抗したウマイル・イブヌル・フバーブ 'Umayr b. al-Hubab の子孫である。かれはヤズィード・イブン・ハーティムの軍に從つてイフリーキーヤに移り、ビザンツ時代の難攻不落の城塞をもつカスライン al-Qasrayn (Cilium) を与えられた (Abbar I 110)。かれはイムラーンと親しく、イブラーヒームに協力してタンマームと戦った (Abbar I 111)。

三 バスラ軍のアーシル・イブヌル・ムアンマル タミーム族と近親のタイム *Taym* al-Rabab 族に属する。かれの父

はヤズィード・イブン・ハーティムとともにイフリーキーヤに移ったかれのバスラの僚友であり、古代アラブの歴史 *Ayyām al-ʿArab* や詩に精通していた (Abbar I 107)。アーシル自身はカステイリーヤ *Qasīliya* (Jarīd) 地方の代官を努め、タンマームとフライシユに対してはイブラーヒーム側に立ち、カイラワーンのシュルタ長官に任命された (Abbar I 106-7)。

四 トゥーヌスのクライシユ *Quraysh* b. al-ʿIṣṣāʾ (Athir 235-6) かれについては詳細は不明である。

反乱はジュマダー第二月／三ー四月に *ahl Qayrawān* が起こしたようである (Athir 235)。タールィビーの解釈とは違つて *ahl Qayrawān* とは *ahl al-Basraʾ*, *ahl al-Kūfaʾ*, *ahl Khurāsān* などと同じ用法であり、カイラワーンのアラブ兵を指す。すなわち、カイラワーンの軍の主力も反乱に加わつた。ただし、イムラーンの兄弟アブー・ナジュダ *Abū Najda Yazīd* が伝承学者であつた (ʿArab 160) にもかかわらず、もつとも有力な法学者であるホラーサーン軍出身のアサド・イブヌル・フラート *Asad b. al-Furat* はイムラーンの誘いを拒否して、中立を保つた (Athir 236; Abbar I 105)。

この反乱に呼応して、ザーブやトゥーヌスからイムラーンやクライシユらが駆けつけ、カイラワーンを支配下におき、アッバースィヤを攻撃すべく両都市間に軍営を張つた。これに対して、イブラーヒームはアッバースィヤの周囲を濠で囲み、その包囲は一年にも及んだ。結局は、アッバース朝がエジプトから送つた金が兵士名簿 *diwān* に登録されてゐる兵に給与 *ʿarṣāq* として支給され、兵士の大半は反乱から離脱した。イムラーン、アムル、アーミルらはザーブ地方への逃走を余儀なくされ、ザーブを支配しつづけた。イブラーヒームはカイラワーンの城壁を部分的に破壊し、城門を撤去した (Nuwayrī 104-5; Athir 157, 235-6; Baladhurī 234)。

イムラーンらはイブラーヒームの死後、コーラン解釈学者ヤフヤー・イブン・サラーム *Yahya b. Salam al-Basrī al-ʿIyāmī* の調停によってその子アブドゥッラー (在任一九六二〇一／八二二七) からアマーンを与えられたが、アッバースィヤの宮殿に軟禁されたイムラーンは二〇〇／八一五年に処刑された (Abbar I 105; *ʿayn* 352; Nuwayrī 105; *Maḥk*

123)。一方、アムルは許され、カスラインがジャズイーラに帰郷した。^⑤

このように、この反乱はザーブのホラーサーン軍やシリア軍、バスラ軍の一部がイブラーヒームから離反したものである。この点ではターリビの解釈はほぼ正しいが、かれはここでもタミーム族内部のサアド族(イブラーヒーム)対ラビアー族(イムラン)とか、タミーム族対タイム族(アーミル)とか、タミーム族対カイス族とかいった部族主義的解釈をもちこもうとしている。^⑥

アブドゥッラーの弟ズィヤーダトゥッラー Ziyadullah (一〇一三/八一七—三八)はいつそうホラーサーン軍やシリア軍を遠ざけて (Nuwayri 107-8; Idhari 96)、マワリーを重用し、そのひとりアブー・ハールーン Abu Harun Musa をカイラワン代官に任命した (Nuwayri 108)。アムルは二〇八/八三三—四年、再びカスラインに拠って反乱を起こした。しかし、ズィヤーダトゥッラーによって派遣されたアブー・ハールーン指揮下の軍に降伏し、アマーンを与えられていたにもかかわらず、二人の子とともに処刑された (Nuwayri 108; Idhari 97-8; Abbar I 110, 382)。

以上のように、この反乱は従来のアラブ間闘争そのものではなく、アラブが総体として、支配層としての特権を死守するため総督に対して起こしたものであるが、新支配層としてのアビードを含めた支配層諸集団間の土地や税収の争奪という面では共通の性格をもつ。

① のち八三六年に、ナポリ Napoli がベネヴェント Benevento 公シカルド Sciaro と条約を結び、イタリア半島南部のロンバルド諸公国から購入した奴隷をアラブに輸出しないことを約束したこと (Tabari 532) から見て、イブラーヒームのころからイタリヤ人奴隷貿易が活発化していたとみてよい。また、九世紀にはチャド湖北岸・東岸のカーネム Kanem 地方に黒人遊牧民のザガーワ Zaghawa 族の王国が成立してついで (Ya'qubi, I vol. 1, 193; Yaqut vol. 3, 142)、カワール Kawar、サウイーラ Sawila のオアシスを經由した黒人奴隷貿易が始

まった (Ya'qubi, II 346)。ただ、これらの奴隷はおもに家内向けであって、アビード兵は奴隷ではなく、応募兵かも知れない。王の奴隷という表現はアケメネス朝ペルシア帝国以来、しばしば世襲貴族や官僚、軍人に対して使用される。R. Frye, *The heritage of Persia*, 2nd edition, London, 1976, pp. 55, 120. マンパース朝でもその傾向は強まった。Amabe, *emergence*, p. 224.

② この場合、奴隷を含むアラブの出身で、高官、総督の腹心、兵となったものを指すのであろう。アビードと重なる部分がある。

③ Crone, *Slaves on horses*, pp. 107-8; 'Abd Dixon, *The Umayyad caliphate*, pp. 89-102.

④ Talbi, p. 151. アラブ兵やブルジョワ、職人ではなく、下層民(?)としている。

⑤ アムルはジャズイラに帰郷したのかも知れない。というのは、アミンとマームーンの内乱直後の混乱期に、ウカイル、Uqayl 族のナスル・イブン・シャバス Nasr b. Shabath とともにジャズイラ、スグルの都市やキリスト教修道院をさかんに略奪したスライム族の

ムルがかれと同一人物の可能性があるからである (Tabari 841-5; Ahr 259; Ya'qubi, T 434-5, 439-40; Michel 21-2, 25-7)。ヤッブとすれば、かれはマームーンの将ターヒル Tahir b. al-Husayn の攻撃を受けたあと、カスラインに帰ったことになるし、アムルの討伐もマームーンの命令による可能性が出てくる。ただし、イブヌル・アシルは Amr b. 'Abd al-'Aziz と同じである。

⑥ Talbi, pp. 148-9, 159.

五 マンスール・イブン・ナスルとアーミル・イブン・ナーフィーの反乱

二〇九／八二四年からズイヤーダトゥッラーに対して軍の最大の反乱が始まったが、この反乱がホラーサーン軍、シリア軍、バスラ軍の主要部分を結集したもので、イムラーンとアムルの反乱の継続に過ぎないことは指導者や反乱兵士の構成で明らかである。

一 マンスール・イブン・ナスル Mansūr b. Nasr カイス系ハワーズイン Hawāzin 族の一派ジュシヤム Jusham 族に属し、預言者ムハンマドに対するフナイン Hunayn の戦いで戦死したドゥライド Durayd b. al-Simma の子孫である。かれもムハンマド・イブヌル・アシュアス軍に加わってイフリーキーヤに移ったとされ (Ya'qubi, B 347)、したがって、ホラーサーン軍に属するのである。かれはローマ以来のトゥンブザ Tunbūdhā の城塞に拠り、その地方の広大な土地を所有していたと思われる。アムルの反乱当時は、タラーブルスの代官であったが、アムルの処刑に強く反発し、免職されたという。トゥーヌスの邸宅 *manzil* に帰ったマンスールは二〇九年、軍の將にさかんに手紙を書き、反乱への同調を求めた (Nuwayri 108; Abbar II 382; Yaqūt vol. 4, 43)。ターリビーはかれの反乱をもまたカイス族の党

派精神に帰している。^①

二 アーミル・イブン・ナーフイー 'Amir b. Naḥī' b. 'Abd al-Rahmān b. 'Amir イハメンのズズヒジハ Madhrij 系ムスリーヤ Musliya 族の出身でホラーサーン軍に属し、^② 同族のアーミル・イブン・イスマール 'Amir b. Ismā'īl b. 'Amir はウマイヤ朝最後のカリフ、マルワーン Marwān 二世をエジプトで追い詰めて殺したことで知られる (Tabarī 46; Abbar I 187, II 383)。祖父アブドゥッラフマーンはイブヌル・アシュアスとともにイフリーキヤに移り、アーミル自身はサビーバ Sabība (Suḥas) に土地をまつた。ターリビイーは東方の歴史に暗いため、al-Azraq という異名から、かれがマデイーナのアンサール Ansār に属すると考えている。^③

三 アブドゥッサラーム・イブヌル・ムファッラジ 'Abd al-Salam b. al-Mufarraj' イブヌル・アシュアスとともにイフリーキヤに移ったホラーサーン軍の将であり (Ya'qūbī, B 347; Abbar I 187) 'バージャに土地をもつた (Tabarī 102; Athīr 405)。かれはタミーム系ラビーア族 (Athīr 440) に属すると思われる。ヤシュクル Yashkur 族 (Abbar II 385) とも伝えられるのは、ヤシュクル族やバクル Bakr 族を含むまったく別系統のラビーア族と勘違いされたからであろう。

四 ファドル・イブン・アビル・アンバル Fadl b. Abī'l-'Anbar ターリビイーはかれをタミーム族またはカイス系ズブヤーン Dhubyān 族のアンバル族に属するとしているが、^④ これは単にかれの個人名であって、部族を示すものではない。ただ、かれがアブー・シャリーク半島に征服以来定着していた旧イフリーキヤ軍に属するのか、ここに土地を獲得したホラーサーン軍に属するのかが不明である。

アラブ軍の大半が反乱に走り、アグラブ朝の支持者はおもにアビードやマワリーに限られるようになったことは次の例から明らかである。

一 ズイヤーダトゥッラーはマンスールに対して、ホラーサーン軍のハムザ・イブヌッ・サッバールの子ムハンマドを

指揮官としたおもにマワーリーからなる三百または五百騎を派遣したが、かれらは二〇九年サファル月二五日／八二四年六月二七日、トゥーヌスの造船所 *dar al-sina'a* でトゥーヌスのホラーサン軍 *ahna'* に支持されたマンズールに急襲されて、多くが虐殺された。マンズールは不退転の決意を示すため、イブラーヒームのいここにあたるトゥーヌス代官イスマール・イブン・スフヤーン *Isma'il b. Sufyan b. Salim* を殺した。

二 つぎにズィヤードトゥッラーがいとこのガルブーン *Ghalbun b. 'Abdillah* 指揮下に派遣したホラーサン軍を中心としていたと思われる軍 *jund* はマンズールに同情的で、トゥーヌスでこれに合流するか、バージャ、アブー・シャリーク半島、サトフーラ *Saffura* 地方、マイダラ *Maydara (Amaadara)*、ウルブス、サビーバなど、指導者が土地もつところを中心に各地に散って自立していった (*Nuwayri* 108-11; *Tdhar* 98-100; *Athir* 330-1, 390; *Abbar* I 186, II 382-3; *Yaqut* vol.4, 43)。

三 カイラワーンの兵はイムラーンの反乱時と同様、二〇九年ジュマード第一月五日／八二四年九月三日、マンズールを市内に迎え入れ、マンズールのアッバースィヤ攻撃に参加し、破壊されていた城壁を再建した。しかし、四〇日後、マンズールはアビードや一部のホラーサン軍に支持されたズィヤードトゥッラーに破れ、トゥーヌスに撤退した。カイラワーンの城壁は再び破壊され、城門は撤去された (*Tdhar* 100; *Nuwayri* 111-2; *Athir* 331-2)。カイラワーンの兵の多くはマンズールなどの指導者に従って、各地に散ったし、二二〇／八二五―六年には、カイラワーンの三百の兵とその家族はズィヤードトゥッラーの承認のもとにモロッコのファースのカラウイーイン *Qarawiyin* 地区に移住した^④。マンズールは翌年カイラワーンを再度占領して、自側の兵の妻子をトゥーヌスに救出した (*Athir* 332; *Tdhar* 101)。

四 翌春の二二〇年ムハッラム月／八二五年五月、ズィヤードトゥッラーはいとこのアブー・フィフル *Abū Fihir Muhammad b. 'Abdillah* 指揮下のアビード、マワーリーを主体とした兵をアーミルの本拠サビーバに派遣したが、

この軍はアーミルによって撃退され、アグラブ朝側にとどまった数少ないホラーサーン軍の将であるハムザの子ムハンマドは戦死した。このため、イブラーヒーム以来蓄えられていた金で新たな兵を募集しなければならなくなった (Ahrir 332; Nuwayri 111; Idhari 100-1; Abhar I 166-7, 186)。

五 アーミルは勝ちに乗じて、南部のカスティリヤ地方に侵攻したが、この地のイーフラン *ʿIfrān* 族を主体としたバベルはかれへの協力を拒み、おそらく金で雇われて、カイラワーンから派遣されたスフヤーン・イブン・サワード *Sufyān b. Sawāda* (エジプト総督サーリムの兄弟) (指揮下の二百騎からなるアグラブ朝側のディーワーンに登録された兵と合流した。アーミルはこの地方の主邑トゥザル *Tūzar* (Thusurus) からナフザーワ *Nafzawa* 地方に抜ける前に、タクユース *Taqyūs* (Thiges) で敗退した (Idhari 101; Nuwayri 112; Ahrir 333; Khaldūn 424)。

この結果、ズィヤーダトゥッラーの手に残ったのは、首都のほか、海岸のサーヒル *Sahīl* 地方、カービス、タラーブルスと、南部内陸のナフザーワ、カスティリヤ地方だけになった。マンスールは反乱を正当化するため、カイラワーンを最初に占領したとき、そのカーディー、アブー・ムフリズ *Abū Muḥriz Muḥammad b. ʿAbdillāh al-Kinānī* とアサド・イブヌル・フラート (二人が同時にカーディーであることは *ʿArab* 166) に対し、ズィヤーダトゥッラーの政治がイスラームに反すると認定させようとして拒否された (*Muslim* 188-9)。かれはまた自らの名でデイルハム *dīhan* 銀貨を発行し、その貨幣にはアグラブ朝の勝利 *ghalib* のかわりに公正 *ʿadl* と刻印させた (Idhari 101) し、ズィヤーダトゥッラーに対して、一族、財産とともにイフリーキヤから退去することを要求した (Idhari 100-1; Nuwayri 112; Ahrir 332)。

戦線が膠着すると、アラブの反乱指導者はより多い土地、税収の分け前を求めて、たがいに闘争するようになった。二一〇/八二六-七年、トゥーヌスに移っていたアーミルはマンスールをトゥンブズに急襲し、マンスールはウルブスに逃亡した。ウルブスのディマシユク軍団は長期の包囲に耐えてまでもかれを保護する意志がなかったため、マンスールはバージャのホラーサーン軍の指導者アブドゥッサラームの調停によって東方に帰る条件で降伏したが、護送中クルバ

Qurba (Coreva)⁹⁾で殺害された (Iḥārī 101-2; Nuwayrī 113; Aḥīr 404-5; Abbar II 384)。この結果、アブドゥッサラームやウルブスのシリア軍はアーミルに反発するようになった (Iḥārī 102)。アブドゥッサラームに敗れたトゥーヌスからクルバに後退を余儀なくされ (Nuwayrī 113-4; Abbar II 384-5)、二一三年ラビー第二月／八二八年七月、おそらくアラブ朝のマウラーであるムティール Mūtīr の指揮下の総督軍によるクルバ包囲中に死んだ。かれの子供たちや兵はかれの遺言に従って、配下のホラーサーン軍とともにただちに降伏して、許された (Nuwayrī 114; Iḥārī 103; Aḥīr 405 [AH 214年]; Abbar II 385; *wuzn 371)。

アブドゥッサラームはウルブス付近のウッバ Ubba の城塞に拠ったムティールへの抗戦に追われる一方、二二三／八二八年には、トスカーナ地方のルッカ Lucca 伯によるカルタゴ近辺への攻撃やサトフーラ地方のベルベルの反抗にも苦しむようになった (*wuzn 371-2)。かれは二一八／八三三年、ズイヤーダトゥッラーがアブー・シャリーク半島に派遣した軍に対して、半島のアラブの指導者ファドル・イブン・アビル・アンバルと合同して戦って、戦死した (Aḥīr 440; Nuwayrī 115)。ファドルも半島から追われたあと、トゥーヌスのアラブの支持を得て、トゥーヌスに籠城した。しかし、同じ年のラマダーン月／九一十月、トゥーヌスはアブー・フィフルの攻撃の前に陥落し、ファドルや法学者たちを含む多くのトゥーヌスのアラブは殺戮され、その市壁は破壊された。このとき逃走したものにアマーンが与えられたのはようやく翌年のことである (Aḥīr 440; Iḥārī 105; Yaḥūbī, B 349; Maḥīrī 169-70; *Arab 224-5)。

マンスールがカイス系であり、アブドゥッサラームもまた非ヤマン系であるため、史料はアブドゥッサラーム側を *Mudariya* と呼んでいる。このことから、ターリビイーはアブドゥッサラームとアーミルの闘争をイスラーム以前のはるか太古からつづくアラブの北族 *Mudar* と南族 *Yaman* との伝統的な部族間闘争というきわめてステレオタイプのな解釈をしている¹⁰⁾。しかし、この闘争の本質はイムラーン・アムルの乱と同様、支配層としての特権を死守しようとするアラブによるアラブ朝総督への反抗であり、また、アラブが総体としてアラブ朝に反抗するだけでなく、かれらの間でもたが

いに闘争したことに現れているように、アビードをも含めた支配層諸集団間の限られた土地や税収の争奪という点ではそれ以前のアラブ反乱と共通した性格をもつ。

ズィヤーダトゥッラーがまだ反乱が継続中の二二二年ラビー第一月／八二七年六月、突然従来のビザンツとの友好関係を破棄して、カーディーのアサド・イブヌル・フラートの指揮下にシチリア征服軍をスース *Sūs* (Hadrumetum) の港から派遣した (Nuwayrī 354-6; Aḥr 333-5; Ṭḥarī 102; *ʿyẓn* 370; Maliki 186-7) のは、ターリビーが強調するように、反乱をいまだつづけているアラブにも体面を保つ自然な形で帰順するまたとない機会を与えると同時に、シチリアで新たな土地と税収を獲得することによって、この人口問題を抜本的に解決するためであったと考えられる。ザーフ以西のアルジェリアではなくシチリアを標的にしたのは、シチリアの方がより肥沃な土地と税収が多く、征服が容易と判断されたからに違いない。^⑩

バージャでは、ホラーサン軍に属すると思われるタミーム族のアリー・イブン・フマイド *ʿAlī b. Ḥumayd* が中心になってアグラブ朝に帰順し、その子、アブー・アブディッラー *Abū ʿAbdillāh* とアブー・フマイド *Abū Ḥumayd* の兄弟は総理大臣 *wazīr* に任命された (Nuwayrī 118)。この兄弟が総督ムハンマド一世のとき、二二二／八四六年に、総督の弟アブー・ジャッファル *Abū Jaʿfar Aḥmad* のクーデターによって虐殺されるまで (Nuwayrī 118-20; Ṭḥarī 108-9)、兄弟の一族がバージャの総督職をほぼ独占しつづけた (Bakr 57)。こうして、ホラーサン軍の一部はアグラブ朝と妥協し、権力の中核に位置を占めることさえできたのである。

- ① Talbi, p. 178.
 - ② Talbi, pp. 201-2.
 - ③ Talbi, p. 210, note 1.
 - ④ Talbi, pp. 189, 377.
 - ⑤ Talbi, p. 190. アブー・シャリーク半島のマンズイル・タミーム
 - ⑥ ①から⑤の文脈から推定している。Manzī Tamīm 付近で発見された銀貨二二〇年と刻印されていることから、ターリビー (p. 177, note 2) はこれがサビーバの戦いのあと、マンズイルの二回目の短期間のカイラワン占領時に発行されたと推定している。
- クルバの位置については Talbi, p. 198.

⑦ Talbi, p. 208, note 1.

⑧ Talbi, pp. 200-3.

⑨ イブラーヒームはビザンツのシチリア総督による攻撃を防ぐために、かれとの友好関係を維持したし (Talbi, 397, 401)。子アブドゥッラーは法学者を主体としたカイラワーンの指導者 *shaykh* の承認のもとに、シチリア総督と正式の休戦 *hudna* を締結してゐた (Malikī 186; Talbi, 402)。

⑩ アッバース朝のマームーンは二二五／八三〇年早春から二二八／八三三年晩夏に死ぬまで四年間にわたって、連年ビザンツ領カッパドキアへの遠征を自ら指揮した。この遠征の目的は父ラシードの政策を継

承してカッパドキアをイスラーム領に組み込み、その辺境として設定することにあつた（余部「ビザンツ辺境政策」二二—四九頁）。したがって、マームーンがこの遠征に連動する形で、ズィヤードトゥッラーにビザンツ領シチリア遠征を命じた可能性は大いにある。事実、マームーンが「コーラン創造説」を固定教義化すると、ズィヤードトゥッラーもカーディー、イブン・アビー・ムフリズ Ahmad b. Abi Muhriz が死んだ二二二／八三六年 (Iḥḥarī 106; Arab 167; Malikī 305, 309; Talbi 215) に、「コーラン創造説」派のイブン・アビル・ジャワード 'Abdullāh b. Abī J. Jawād をカーディーに任命し (Talbi 227-8)、反「コーラン創造説」派のサフスーンへの圧迫を許した。

まとめと展望

長期にわたる一連の闘争の本質はイフリーキーヤにおけるアラブの人口過剰とそれに伴って不足するようになった土地と税収の争奪であり、付随的には権力の中核への参画をめぐる争いであつたと言える。アラブ人口は三次にわたる大規模な移住によって、またローマ系原住民の同化によつても、総督ヤズィード・イブン・ハーティム以後はイフリーキーヤの総人口の大きな割合を占めるようになっていた。この結果、アラブが経済的利益と権力の共同享受を通じて総体として支配層を構成することが不可能になつた。

まず、ウマイヤ朝時代にイフリーキーヤを征服したエジプト軍（のちのイフリーキーヤ軍）と少数のシリア軍がイスラームに改宗した一部のベルベルとともにイフリーキーヤの土地や税収を分割したが、モロッコ北部とアルジェリア北西部のベルベルの反乱鎮圧に失敗した。このため、かれらは、ウマイヤ朝末期に派遣されてベルベルをイフリーキーヤから撃退し、防衛のためそのまま現地に定着させられたシリア軍と、土地や税収の分割を余儀なくされた。このシリア軍とイフ

リーキーヤ軍もタラーブルス地方のイバード派のベルベルやアルジェリアのベルベルの侵攻を防ぐことに失敗した。アッバス朝によって新たにイフリーキーヤに派遣されたホラーサン軍・シリア軍・バスラ軍はイフリーキーヤに侵攻していたベルベルを一掃し、アッバス朝の支配確立のため、そのままイフリーキーヤに定着を命じられ、その報償として従来のアラブから多くの土地と給与を奪い、権力を独占するようになった。このホラーサン軍と新シリア軍、バスラ軍も数が多すぎ、しかも、ベルベルの抵抗を排してザーブ以西に進出することはできなかったため、かれらの間で闘争が生じた。その結果、バスラ出身のムハッラブ家諸総督のもとで優遇されていたシリア軍とバスラ軍に対して、ホラーサン軍が反乱を起こして勝利し、バスラ軍がムハッラブ家とともに没落し、シリア軍も大きく影響力を減じた。つぎに、ホラーサン軍内部でトゥーヌス駐留軍とザーブ駐留軍の闘争が起こり、ザーブ軍が勝利した結果、その指導者、イブラーヒム・イブヌル・アグラブがイフリーキーヤ総督に任命された。

しかし、イブラーヒムはザーブのホラーサン軍から同僚としての団結心以上の忠誠を期待することができず、かれらを全面的に排除するわけではないが、新たな権力基盤として自らに直属し、自らのみに忠実な外人近衛兵の採用、非アラブ高官の登用を断行し、アラブ都市カイラワーンを離れて、独自の行政宮殿都市アッバースィーヤに移った。かれの子アブドゥッラー、ズィヤードトゥッラーはアッバース朝のアミンとマームーンの内乱に乗じて総督職を継ぐことに成功し、父の政策を継承、強化した。これに対して、トゥーヌス地方を中心とした旧イフリーキーヤ軍のアラブが奪権闘争を開始する一方、支配層としての特権が犯されることを恐れたホラーサン軍もアグラブ朝に対して執拗な闘争をつづけ、戦線が膠着すると、自分たちの間での闘争に陥った。

このようにして、アラブ諸軍団の反乱はアラブ間闘争から、外人近衛兵を採用して新たな支配集団を構築しようとした総督に対する抵抗へと変質していった。しかし、すべての場合を通じて、アラブが支配層としての既得特権を守るため、あるいは回復するために戦い、あらゆる闘争が外人近衛兵も含めて支配層諸集団間の土地・税収の争奪や権力闘争である

ことには変わりがない。

この闘争が経済的利益や権力をなるべく少数の特権集団で独占しようとするものである以上、アラブ諸勢力はイフリーキーヤの人口の過半を占めるローマ系のキリスト教徒住民やユダヤ教徒、また、ベルベル（ムスリム・キリスト教徒・多神教徒）に支持を訴えることもなく、かれらを闘争の局外に置いた。^①カイラワーンの法学者たちはこのようなイスラーム教徒間の利害争いへの関与を拒み、反乱に組しないことによって、アッバース朝から正式に任命された合法的な州政府であるアグラブ朝を暗黙の内に支持した。ズィヤーダトゥッラーは自らの権力をより正当化して法学者・禁欲家やアラブ、ムスリムの積極的な支持を結集し、かつ土地・税収の不足問題を抜本的に解決し、内乱を収束すべく、シチリア征服戦争を突然に開始したのである。

翻ってイスラーム世界全体を見渡すと、アッバース朝は辺境を除く支配諸地域では、地域のアラブから税収の一部を奪い、中央に吸い上げる政策を強力に遂行しようとしていた。このため、エジプトのアラブはアッバース朝に執拗に反乱をつづける一方、自身の間でもイフリーキーヤのアラブに劣らないほど、税収のはげしい争奪を繰り返していた。^②また、ホラーサーン・中央アジア *Ma warāʾan-Nahr* やアゼルバイジャン *Adharbayjan*・アルメニア *Arminiya* のような伝統的な支配層の勢力が強い辺境地域では、土着の王侯や豪族などの勢力を排除もしくは削減し、税収の大幅な増収を図り、大きな抵抗に直面していた。^③これに対し、支配がきわめて不安定な辺境であったイフリーキーヤの場合、アッバース朝が税収の一部の中央送付を図ったことは、ラシードがイブラーヒームに総督任命の条件として義務づけたとされる以外にない。他の辺境スグルルやホラーサーンでは財源の不足分が中央や他州から補填されていたが、イフリーキーヤの場合は、大インド砂漠やカッチ大湿地によってインド *al-Hind* から隔てられていたシンド *Sind*（インダス川中流・下流域）と並んで、比較的アッバース朝から軽視され、補填がじゅうぶんではなかったため、アラブ間の闘争が生じた。しかも、アグラブ朝の総督が、外人からなる近衛軍を組織してアラブへの依存からの脱却を図ったため、アラブ総体からの抵抗に直面するよ

になった。結局、ホラーサーン軍、シリア軍を中心としたアラブはアグラブ朝体制下で軍人として機能し、外人近衛兵などに利益や権力の一部を奪われたものの、ある程度、伝統的な特権を維持することに成功した。

かれらは辺境の外側のベルベルの征服には失敗し、十世紀以後、ベルベル諸政権がイフリーキーヤを征服して王朝を建てるようになった。ところが、それ以前に、ローマ化やキリスト教化がふじゅうぶんであったアルジェリア・モロッコのベルベルはアラブによる支配を拒否する一方では、イスラーム化を深めていた^④。ローマ化やキリスト教化をほとんど拒否してきたアルジェリア北東部の峻険な小カビリーヤ Lesser Kabylia 山地のクターマ Kutama 族でさえイスラームの影響を受け、九世紀末には東方からの宣教師を受け入れて、アリーの子孫を世直しの政治・宗教指導者、イマーム *imam* と認める形のイスラーム (イスマーイール派) を受容し、団結して、二九七/九〇九年にはアグラブ朝を滅ぼしてファティマ朝を建国した。アルジェリア北東部の今ひとつの峻険な山地、アウラーズ *Aures* 山地のハッワラー *Hawwara* 族もこれを見て、かれら自身のイスラーム指導者の指導を受け入れて、独自の建国運動をはじめ、三三四/九四六年には、一時イフリーキーヤの大半を占領したが、結局クターマ族と、新たにファティマ朝に従うようになったアルジェリア中央高地のサンハージャ *Santaja* 系タルカータ *Talkata* 族によって敗れ去った。クターマ族とタルカータ族はイフリーキーヤの支配層としてアラブやアグラブ朝の外人近衛兵にとってかわった結果、アラブの子孫と称するようになった。しかし、ファティマ朝がイスラーム政権として正当性を主張するためアグラブ朝との継続性を重視し、また、クターマ族のみに権力基盤を置くことに危険を感じたため、アラブのかなりの部分を正規軍 *jund* の兵としてとどめた。このように、イフリーキーヤのアラブ軍は革命的な形ではなく、緩やかな過程を経て特権を失っていったのである。

① Talbi, p. 213.

② この分野では詳細な研究はないようである。単純には Amade, *em. armenes*, pp. 134-5. なお、森本氏「初期イスラム時代エジプト税制

史の研究」は官僚や在地指導者から見た場合の農民からの徴税という一点のみに視野を限った結果、その税収がいかに誰のために消費されたのかという点や、エジプトのアラブによる税収中央送付に対する

強い抵抗、アラブ間の税収の争奪という非常に重要なポイントを見落としてゐる。

③ Amabe, *emergence*, chapter 4 “The lords of Khurasan and the ‘Abbasid Central Government”, chapter 5 “Bakak of Badkhh and the ‘Abbasids”.

④ アッバース朝に抵抗して、タラーブルス地方から移住したベルベル諸部族のうち、イバード派はアルジェリア北西部のティーハルトを中

心にルスタム朝を建国したし、イーフラン族はティリムサーン(Tiimsan (Tincen)) 地方に建国した。ともにアッバース朝の支配権を認めなかったものの、イスラームを放棄しなかった。この影響でシヤラフ Shalaf (Chéih) 川流域のマグラーフ Maghrwa 族もイスラーム教徒となつて、ティリムサーンの支配をイーフラン族と争うようになった。また、モロッコ北部の有力なアウラバ Awraha 族はアリーの子孫を迎えてイドリース朝を建国し、イスラーム化を深めた。

（東京経済大学教授

The Arab Revolts in Ifrīqīya, 794—827

by

AMABE Fukuzo

It is well known that Arab and Khurāsāni warriors initiated many revolts in Ifrīqīya (present-day Tunisia and northeast Algeria) in the early ‘Abbāsīd caliphate. Talbi, who is the only person to give an in-depth analysis of the problem, interprets these revolts in the light of Yamani-Muḍari inter-Arab tribal conflict or Sunni-Shī‘ī politico-religious strife. This stereotypical and totally misleading interpretation derives from his lack of knowledge of ‘Abbāsīd history. In fact, neither Yamani-Muḍari nor Sunni-Shī‘ī conflict was then found anywhere in the Islamic world, let alone Ifrīqīya. The real cause of the revolts was a shortage of wealth to be distributed after the Arabs had conquered the region; i.e. friction among the various Arab-Khurāsāni groups over the distribution of available property and tax revenue.

The first revolt, after a temporary equilibrium under the Baṣran Muhallabid governors, was an uprising of the Khurāsānis stationed in Tūnus (Tunis) against the Baṣrans (who were mostly concentrated in Qayrawān) and the Syrians (who were divided into legions and settled in various localities), who had been favorably treated by the Muhallabid governors. This rebellion was led by two Khurāsānis: ‘Abdullāh b. al-Jārūd (‘Abdawayh) and Ibn al-Fārsī. (Interestingly, ‘Abdawayh originally came from a family of Baṣran noblemen.) In the end, the Khurāsānis were persuaded to lay down their arms by the new Khurāsāni army, which was sent from Baghdād by Caliph Hārūn al-Rashīd under the command of Harthama b. A‘yan.

Although some Syrians also joined the second revolt, it was basically an inter-Khurāsāni conflict between the Tunisian and Zābi armies. This revolt was also launched by Khurāsāni soldiers in Tūnus under the leadership of the governor of Tūnus, Tammām b. Tamīm, because the ‘Abbāsīd governor of Ifrīqīya attempted to reduce their salaries so that he would have enough to cover the salaries of a large Khurāsāni garrison under the command of Ibrāhīm b. al-Aghlab in Zāb, the westernmost outpost on the border with Maghrib (western Algeria and Morocco). The victor, Ibrāhīm b. al-Aghlab, himself a Khurāsāni, was subsequently appointed

governor of Ifrīqiya.

The third revolt was an uprising in Tūnus by Ifrīqi Arabs of Egyptian origin (descendants of the Arab conquerors of Ifrīqiya) who had previously lost their land and prerogatives to the Khurāsānis. It was led by Khuraysh (Ḥamdīs), whose father-in-law, Ḥasan b. Ḥarb, had led a rebellion thirty-five years previously. Ifrīqīs from all over the territory flocked to Tūnus to join the revolt. They were easily defeated by the Khurāsānis, who were sent from Qayrawān by Ibrāhīm.

As time went by, the Zābi Khurāsānis became increasingly alienated by their old comrade, Ibrāhīm b. al-Aghlab, as he became increasingly autocratic, basing his power on newly recruited foreign mercenaries (Italians and Negroes). The Zābi Khurāsānis (led by 'Imrān b. Mujālid, once Ibrāhīm's confidant), Syrians (led by 'Amr b. Mu'āwiya), and Baṣrans (led by 'Āmir b. al-Mu'ammār), coalesced against Ibrāhīm, but the rebellion dissolved when Ibrāhīm offered them salaries.

This revolt was resumed and developed into the final and largest revolt by Maṣṣūr b. Naṣr, 'Āmir b. Nāfi', and 'Abd al-Salām b. al-Mufarraḡ, Khurāsāni Arab leaders and prominent landlords. The governor Ziyādātullāh, Ibrāhīm's son, bided his time, waiting for quarrels and in-fighting to create divisions among the rebels, while diverting Arab attention to the conquest of Sicily.

The Eastern Policy of the Emperor Vespasian

by

KUWAYAMA Tadafumi

The reign of Vespasian has been considered as an era of the development of the western part of the Roman Empire. But, the eastern part of the Empire is as important as the western part. For the basis of Vespasian's faction in the Civil War in A. D. 69 was in the eastern part, and during his reign, the eastern frontier of the Roman Empire was quite changed: the client kingdoms such as Commagene and Armenia Minor were incorporated into the Empire; Cappadocia was joined with Galatia and stationed by two legions. Concerning these changes, other studies have insisted that Vespasian merely intended to make a defence line. By offering reasons other than military aspects, I demonstrate the further significance